

東奥日報

夕刊

2010(平成22)年
5月10日(月)

〒030-0180
青森市第二問屋町3丁目1番89号
東奥日報社
電話(017)739-1111
©東奥日報社 2010

第42665号

ホームページ <http://www.toonippo.co.jp/>

読者相

地域の文化伝えたい ①



アスパムのねぶたの前でわらべ歌を披露する前田さん。アスパムでの活動は100回を超えた

変わらぬ思い 津軽弁で

「おれのあねさましとぎっこ好きで」。4月24日、青森市の県観光物産館アスパムで観光客らを前に、あおもり民話かたりべの会の前田歌子会長(72)＝青森市＝は「しとぎっこ」という津軽のわらべ歌を軽やかに歌った。

お姉さんはうるち米と田さんや「かたりべの会」子どもたちは津軽弁を

「津軽のむがしっこ聞かすりの上着を着て、柔和な笑みを浮かべながら優しく語り掛ける前田さん。津軽弁はぶつきらぼうで乱暴、というイメージを持たれたが、この先そんなことはない。前田さんや「かたりべの会」

「方言はその地方の財産。大事な文化。なくしてはならない」。前田さんは講座を開いて語り部を育てながら、「人の目や耳に触れる機会を多くしないと次の世代に伝わらない」と週末はアスパムで活動している。今年

「かれないっこ焼いとつくらがして焼いでしようゆっこついで、アグアグ」という歌は、冷えた子どもをいろいろで温めてあげるときに歌ったもの。母が手を添えながら歌う情景が思い浮かぶとともに、じんわりと心が温かくなる。

予定。また、地域に伝わるわらべ歌を歌える人が急激に減っている現状も心配だ。「今のうちに形として残さなければ大変なことになる」と、各地を回って録音しておこうと考えている。

「いつの時代も人間の本质は変わらない」。わらべ歌や昔話に込められた思いは、時代が変わっても人々の心に響くはず。その精神は今も生きて伝えられるものがある。前田さんは信じている。

前田さんは弘前市の地主の娘として生まれた。幼いころはあやが2人いて、眠るまで枕元で昔話を語ってもらった。「む

がし むがし ある所に」から始まるゆつたりとした口調。楽しかった時代の思い出がよみがえる。

夢を形に

青森に生きる女性たち

12

もち米の粉で作ったしとぎもちが好きで、前日の夜に9個、今朝7個食べべた。1個隠し持ってそりに乗るとき落としてしまった。捨つのは恥ずかしいが捨てるのももったいないと迷っていたら隣のいたずらっ子に拾われてしまった、というユーモラスな歌詞を標準語で解説すると、観客から笑いが起こった。

前田さんは1997年から着付けの講師として、海外で日本文化を紹介する交流事業に参加。自国の文化や歴史について誇らしげに語る外国人の姿に接し、感動する一方で日本人、特に県人はどうだろう、と考えてしまった。津軽弁やさまざまな伝統技術、文化が日常生活に溶け込み、受け継がれてきたが、この先も果たしてそうだと考えられるだろうか。

話さなくなってきたおり、子に伝えるはずの親世代も地域の歴史や風土、昔話を知らない人が多い。前田さんは「このままでは津軽の文化は失われてしまう」と強い危機感を抱いた。2005年にNPO法人「県日本文化を伝承する会」をつくり、その活動の一環として「かたりべの会」を始めた。

ところが戦後の農地改革で前田さんの生活は一変してしまった。以来、過去を振り返っても何にもならない」と、幼少時代の思い出を封印して生きてきた。長い年月を経て、ようやく冷静に過去を振り返られるようになったとき、幼いころの思い出が心の潤いになっていたと気づいた。